

文章・談話研究

湯浅千映子

文章・談話とその構成要素に関する研究は、隣接分野の研究とともに2012年も引き続き活発な動きを示しており、関心の高さがうかがわれる。

談話では、非母語話者の会話教育への活用を目的とした著書が相次いで発刊された。雑談の連鎖構造を分析した筒井佐代『雑談の構造分析』(くろしお出版)や大場美和子『接触場面における三者会話の研究』、中井陽子『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』(いずれもひつじ書房)等である。また、特定の表現意図や場面の談話構造に関する研究に、金庚芬『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』(ひつじ書房)、柳慧政『依頼談話の日韓対照研究』(笠間書房)、田中妙子「ドラマのシナリオに見られる『慰め発話』の諸相」『日本語と日本語教育』40、生天目知美・劉雅静・大和啓子「日中韓の友人会話における依頼の談話展開」『筑波応用言語学研究』19、高宮優実「対立場面における会話のストラテジー」『ことば』33、日高水穂「『察し合い』の談話展開に見られる日本語の配慮表現」『「配慮」はどのように示されるか』(ひつじ書房)があった。一方で、談話の話し言葉の形式に着目した研究も見られ、荻原稚佳子「日本語自由会話における『言いさし』使用と解釈の難しさ」『明海大学外国語学部論集』24、高木丈也「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる『中途終了発話文』の出現とその機能」『社会言語科学』15、石黒圭「談話の『場』によるコ系・

ソ系・ア系の指示詞の使い分け」『表現研究』96等があった。

様々なジャンルや媒体・ツールにおける研究も目を引いた。講義の談話と受講者のノートを対応させた伊能裕良「講義理解の手がかりとしての接続表現」『早稲田日本語研究』21、謝罪場面の携帯メールを扱った三宅和子「電子メディアを介した日英の配慮言語行動」(『「配慮」はどのように示されるか』所収)や大沢裕子・安田励子・郷亜里沙「Webサイト上の苦情に対する「謝罪の展開」モデルの提示」『待遇コミュニケーション研究』9、船戸はるな「継続的な文字チャットによる日本語学習者の終助詞「ね」の使用の変化」『日本語教育』152等が挙げられる。

文章では、新聞社説の文章の全体的構造の類型を示した Didik Nurhadi「日本語社説の文章構造における統括性」『名古屋大学国語国文学』105の他、アカデミック・ライティング指導の必要性に鑑み、母語話者と学習者の意見文の文章構造の特徴を明らかにした吉田美登利『日本語作文産出過程の分析と支援ツールの開発』(風間書房)、伊集院郁子・高橋圭子「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴」『日本語・日本学研究』2(東京外国語大学)が見られた。

総じて、日本語教育の現場への還元を最終的な目的に据える研究が顕著な1年であった。今後も非母語話者が子細な感情や配慮を相手に伝えるのに有用な、文を超えるレベルの研究の広がりが予想される。また、話し言葉と書き言葉の中間的な性質を有するメール、チャットなどネット上の表現の研究にも期待したい。

(早稲田大学院生)